

エミール・ヘルフェリッヒと日本：その生涯と日本コレクション

HORI, Sakiko / 堀, 咲子

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

112

(発行年 / Year)

2020-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023216>

エミール・ヘルフェリッヒと日本

—その生涯と日本コレクション—

堀 咲 子

序

戦前のヨーロッパにおいて、日本美術が大々的に紹介され、周知されることになった最大の契機としては、先ず1910年における英国ロンドン開催の日英博覧会が挙げられる。続いて、1939年における独国ベルリン開催の伯林日本古美術展覧会があった。

筆者が修士論文で取り上げた日英博覧会は、日英同盟をきっかけとした政治的意図の強い博覧会であったが、結果的に、浮世絵版画以外の日本美術の真価を本格的に知らせる上で画期的功績を挙げた⁽¹⁾。

日英博覧会以来、日本の海外における古美術展として最大のものが、伯林日本古美術展覧会である。1939年2月28日から3月31日まで開催されたこの展覧会は、第二次世界大戦の開戦間近であるにもかかわらず、推古朝より江戸期までの出陳作品126点のうち4分の3が当時の国宝と重要美術品で占められ、1900年のパリ万博にも劣らぬ質の高さであった。近年においても、この規模と質を超える展覧会が国外で開かれた例はない⁽²⁾。

この伯林日本古美術展覧会を主導したのはオットー・キュンメル（Otto Kummel, 1874-1952）である。彼は20世紀前半のドイツにおける日本美術受容を導いた最重要人物のうちの一人であり、東洋美術史家としても著名だ。伯林日本古美術展覧会における日本側の主導者の一人であった矢代幸雄は、キュンメルを評して「ドイツで日本美術を最もよく理解し、そしてまた、ドイツ国民をして、日本美術に最も親しませた大家」であり、「日本美術の恩人」の一人として名前を挙げている。また、キュンメルが、美術商であった林忠正

の収集品をはじめ、各所からコレクションを集めて形成されたベルリン東洋美術館の日本コレクションは、矢代によれば「とにかくヨーロッパに於てはベルリンを以つて日本美術蒐集として第一」だったという⁽³⁾。

その一方で、キュンメルは1933年にナチス黨員となり、1940年には国民啓蒙・宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッペルスに委託されて、ヨーロッパ各地にあるドイツ起源の美術品や文化財を奪還するためのリスト、いわゆる「キュンメル報告書 (Liste der unbedingt zu plündernden Kunstwerke in ausländischem Besitz)」の作成にあたった人物でもあった。この報告書が1941年1月にヒトラーに提出され、リストに基づいて各国各地よりありとあらゆる文化財および美術品がドイツに奪還されたのである。このため、歴史資料におけるキュンメルの名は、東洋美術史家としてよりも、ナチスによる美術品掠奪計画の協力者として、負の側面が強調されて残されることになった。

一方、矢代幸雄は、伯林日本古美術展覧会は枢軸同盟の文化工作に日本が踊らされた政治手段に過ぎなかったとしつつも、「良い美術というものは、いかなる動機で展覧されようとも、美術それ自身が含む文化的価値をもって人々の良い感化を与えなければやまないもの」であり「高級なる日本美術が大規模にヨーロッパの中心たるベルリンに展覧されただけに、日本美術の良さを西欧世界に知らせる上には、大なる効果があった」と評している⁽⁴⁾。

伯林古美術展覧会の突出した規模と質は、ナチスの日本への政治的接近に乗じて、強い政治色を帯びたかたちで初めて可能であった。1939年2月28日の開会式には、ハーケンクロイツと日章旗がはためき、ヒトラーを筆頭に日独両国の政府要人が並んだという⁽⁵⁾。それゆえ、本来であれば学術的にも文化的にも非常にレベルが高く、大きな価値を認められるべき展覧会が、ナチスと日本による忌わしき戦争への序章として史実に残される結果となった。近年ようやく、この展覧会をテーマに取り上げる研究者が現れてきたものの、現在においてなお、ナチスに対する嫌悪は欧州各地に根強く、この展覧会そのものに対して肯定的な捉え方をすることに厳しい批判をする学者は少なくないという⁽⁶⁾。

以上のように、政治的意図の絡んだ対象を論じようとした場合、どうしても政治学的観点を中心とした評価が為される傾向にある。本論文で試みるのは、そのような一般的には政治学で扱われやすい研究対象を、敢えて国際日本学

という新たな観点から眺めることによって、従来のアプローチでは見えてこなかった結論を導き出そうというものである。

本研究が取り上げるのは、戦前ドイツにおける経済界の要人の一人であったエミール・ヘルフェリッヒ (Emil Helfferich, 1878 - 1972) と、彼の日本観である (以下、ヘルフェリッヒ兄弟も頻出するため、便宜上エミールと表記する)。

エミールもまた、彼が生きた時代背景の影響からナチスと関わりのあった人物である。しかし、その一方で異文化や美術品に対して深い興味関心を持ち、遺品に残された東洋コレクションは数・質ともに一個人の単なる嗜好品の枠を超えている。エミールと日本の関わり、そして遺品コレクションは十分に学術研究の対象として考察され得るものであるが、筆者が調査した限りではこれまで日本において殆ど研究対象とされてこなかった⁽⁷⁾。

エミールは、キュンメル等と比較すれば、主たる戦争犯罪に直接的には関わってはならず、そしてキュンメルのように本格的に日本美術研究に携わっていたわけでもない。しかしながら、エミールを国際日本学的アプローチから研究することの成果を見いだせば、程度の差こそあれ、同じくナチスと関わりのあった人物の功績についても新たな切り口で再評価ができるのではないかと考える。

前述の理由から、本論では、あくまでもエミールの日本観に集中するため、ナチスとの関係や政治的側面、経済界における功績については中心には取り上げない。また、エミール個人の政治的意識等に関しては今後の研究に委ね、日本と関連する点に限定してエミールの生涯を辿ることにする。

1. 生涯

1-1. 家族と故郷

エミール・ヘルフェリッヒは、1878年



(写真1: エミール生家)



(写真 2: 左から、次男フィリップ、エミール、長女エミリー、六男ヴィルヘルム、三男アウグスト、五男テオドル、長男カール)

1月17日、ドイツ連邦南西部の現ラインラント＝プファルツ州ノイシュタット市に生まれた。

父親のフリードリッヒ (Friedrich Gottfried Helfferich, 1845-1917) も、地元ノイシュタットで商人の家庭に生まれ育った。フリードリッヒは、製紙会社を営んでいたフィリップ・ネッケル (Hans Philipp Knoeckel, 1811-1870) の娘アウグステ (Juliana Luisa Augusta Knoeckel, 1847-1924) と結婚して製紙事業を拡大し、成功に導いた。その後、フリードリッヒはバイエルン王立商工会議評議員を務め、1916年にはノイシュタット市名誉市民となった⁽⁸⁾。

フリードリッヒとユリアナの間には6人の息子と1人の娘がおり、エミールは四男である。

長男カール (Karl Theodor Helfferich, 1872-1924) は政治家であり、1916年から17年にかけてドイツ帝国副首相を務めた。現在のノイシュタット市内には彼に因んだカール・ヘルフェリッヒ通り (Karl Helfferich Straße) があり、その功績が称えられている。次男 (Philipp, 1874-1955) と三男 (August, 1876-1958) は父フリードリッヒの製紙工場経営に携わっていた。五男テオド

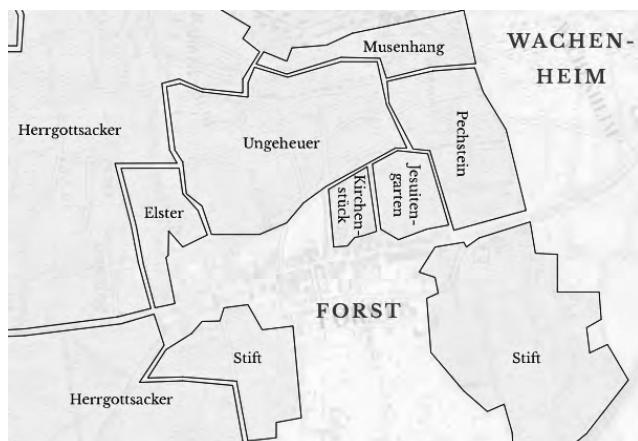
ル (Theodor, 1880-1931) は、エミールと共にインドネシアで茶葉農園事業などに携わった⁽⁹⁾。

ノイシュタット市公文書館に保管されているエミールの出生証明書、および死亡届に記載されている住所は同一であり、晩年はノイシュタット市内の生家で余生を過ごしたことがわかる。生涯独身であり、子もいなかった⁽¹⁰⁾。現在、エミールの生家、及びヘルフェリッヒ家の墓、そして、そこに隣接している、本人と生涯パートナーであったディーナ (Dina Uhlenbeck-Ermeling, 1869-1939) が共に眠る墓はノイシュタット市文化遺産に登録されている⁽¹¹⁾。

なお、筆者はノイシュタット市近郊に一年以上居住しているが、この地域一帯は数世紀にも亘るワインの名醸地としてその名が知れ渡っており、見渡す限り辺り一面に葡萄畑が広がる風光明媚な地域である。広大な葡萄畑のなかには人口一千人程度の集落がところどころに散在しており、各集落には数百年も存続しているワイナリーが少なくない。非常に長閑なワイン醸造地域であるが、逆に、娯楽がほとんど無いといっても過言ではなく、近年では若者が都会に流出してしまい、ワイン造りの後継者を確保できずに閉鎖されるワイナリーも徐々に増えてきている。まして、インターネットも無く、外国の様子をテ



(写真3: Wachenheim 方面から、フォルスト地区のウンゲホイヤー畑を撮影したもの)



(写真 4: Forst 地区とウンゲホイヤー畑の位置)

レビで知る機会もなかった 19 世紀終わりの時代、エミール少年が、遙か先の地平線まで延々と続く葡萄畑を越えた先にある世界に夢を描き、この町を飛び出したい衝動を抑えられずにいたことは想像に難くない。

エミールが晩年に著した自伝 “*Ein Leben I-V*”⁽¹²⁾ には、各国各所で楽しんだ酒の話が頻出しており、かなりの酒豪であったことが伺える。故郷のワインも愛飲しており、ノイシュタット市の北約 6km に位置するフォルスト (Forst) 地区で生産されるフォルスター・ウンゲホイヤー (Forster Ungeheuer) という銘柄のワインを好んでいたようだ。以下は、1936 年にエミールが詠んだウンゲホイヤーの詩である。

1936

Forster Ungeheuer

Carl-Vinzenz Kr. zum Geburtstag

Geht's Dir im Leben einmal gut
Und ist Dir nichts zu teuer,
Dann, lieber Freund, mit frohem Mut,
Trink „Forster Ungeheuer“!

Doch geht es Dir erbärmlich schlecht
In dieser Welt Gemäuer,
Dann, lieber Freund, und dann erst recht
Trink „Forster Ungeheuer“!

(*Ein Leben III*, S.173 カール・ヴァインツェントは「ヒムラー友の会」の一員)

1936 年

フォルスター・ウンゲホイヤー
ーカール・ヴァインツェントの誕生日にー
人生 好調ならば
高すぎるものは何もない
さあ 親愛なる友よ
愉快にウンゲホイヤーを楽しみたまえ!

人生 四面楚歌でさえ
思うようにいかずとも
さあ 親愛なる友よ
大いにウンゲホイヤーを楽しみたまえ!

(訳: 筆者)

1 - 2. 世界を夢見た少年時代

1895年9月のある朝、ノイシュタット中央駅にて、17歳のエミールは母親に見送られながらハンブルグへと旅立った。自伝のなかで、次のように述べている。「17歳というのは、既に一人の人間である。たとえ歳を重ねる毎に顔の皺が増えようとも、その人間の本質は不変であり、魂の鏡である瞳は、たとえ老いても若い時と同じように輝きを失わない。あの時から、今でも私は変わっていないのだ。(E. L. I: 9)」

また、エミールは10歳の時の一つの思い出を綴っている。「ある日、親友と二人で早朝にノイシュタットを出発した。私たちは二人とも、広い世界へ行きたいと思っていたのだ。シュパイヤー (Speyer) まで25kmの道のりを歩いて進んだ。やがて大聖堂に到着した時、その日陰に、生まれて初めてライン川を見た。私たちは聖なる流れで足を洗い清め、また橋の上を歩いた。そこでパンとソーセージを買って食べ、冒険の終着地点に印を付けて、再び25kmの道のりを重い足取りで帰路に就いた。やっと家に辿り着いた時、辺りは真っ暗だった。玄関のドアを開けると、なんとそこには仁王立ちの父親がおり、私は烈火の如く叱責された。父に対して、『僕、ライン川を見たんだ』とだけ答えると、父は呆れ返ってしまった。この日、近郊の森で殺人事件があり、父は消防隊に捜索依頼を要請するところだったのだ。(E. L. I: 12-13)」

「学校のコースを修了した時、果たして自分はこれから何者になるのだろうかと考えていた。私は、何か人とは違うことをしたいと思っていた。子供の頃、一時期アフリカに憧れていたこともあったが、アフリカ専門の探検家になることは考えていなかった。実家にあった私の小さな部屋の壁には大きな世界地図があり、勉強机の上には色鮮やかな日本の傘が掛けてあった。そして棚からは、ヘルゴラント島で両親に買ってもらった剥製のカモメがいつもこちらを覗いていた。そう、海へ、大海へ出たかった。私は海軍に入りたいとずっと思っていたのだ、私の目に間違いが起こるまでは。… (中略) …私は、商人としての素質はかけらも持ち合わせていなかった。しかし、私にとって商人になることは、目的を果たすための手段でしかなかったのだ。私は、広い世界へ出て、そこで自分の思う道を進みたかった。(E. L. I: 17-18)」

視力が悪かったため夢だった海軍への入隊が叶わなくなったエミールは、質

易商になりたいという希望を父親に告げ、了承を得た。16歳を迎えた時、父親の取り計らいにより、まず諸外国語を習得するためにスイスの語学学校で一年間学んだ。その後、貿易商見習いとしてハンブルクへ発っていった。エミールは生涯を振り返り、「この時から、本気で私の人生が始まった」と綴っている (E. L. I: 20)。

1-3. 貿易商として

ハンブルク時代を経て、一年間の兵役中には東南アジアのパナン島（現マレーシア、当時イギリス領）へ派遣され、その後、拠点をオランダ領東インド（以下、蘭印）に移し、エミールは本格的に貿易事業を開始した⁽¹³⁾。ここでは、エミールと日本の関わりに限定して活動を見ていきたい。

エミールによれば、第一次大戦以前、蘭印の在住邦人は非常に少なく、理容師や商売人など限られた極わずかであったという (E. L. I: 341)。

ジャワ島北部の町スラバヤには当時、日本の南国産業株式会社が事務所を設けていた。同社は東ジャワに三か所の所有地を持ち、それぞれで製糖工場、コーヒー農園、コーヒーおよびゴム農園を経営していた (E. L. I: 341)。各プランテーションには、若手日本人が研修のために配置されていたが、全てのプランテーションは欧州の管理下にあった。エミールは同社に対し、個人的なトラブルを含めたあらゆる問題に関する助言を行うコンサルタント業務をしていた。これにより多くの日本人と出会うことになる。エミールは、「日本企業と関わったお陰で、私の活動は東ジャワから中部ジャワへと広がり、ジャワの砂糖文化と接触するきっかけとなった。しかし、それ以上に、私にとっては、日本という新しい世界の扉を開くことになったのだ。」と回想している (E. L. I: 341)。

やがて大戦が進むにつれて徐々に三井などの大手もジャワに支店を置くようになり、ジャワにおける欧州企業も日本と取引を行うようになっていった。しかしながら、当初は「褐色で小柄、言うことは婉曲的でぎこちなく、深く腰を屈めながら贈答品を渡してくる日本流とうまくやっていく方法を誰も知らなかった。(E. L. I: 342)」

初めは異文化による些細な揉め事もしばしば起こったが、特に、当時弱冠

20代であった若手駐在員の有村貫一との出会いをきっかけに、エミールは日本人と徐々に打ち解けていき、交流が深まったという。

エミールは有村を評して、次のように述べている。「教養があり、意志が強く、勤勉で頼もしい存在だった。日本人のなかで一番親しくなり、日本人の礼儀や性質は彼から学ぶことになった。(E. L. I: 342-43)」

「哲学的にも素晴らしい感性の持ち主で、特に彼が日本文化や日本の礼儀について話す時は大変興味を惹かれた。私たちはこれらについて何度も会話を重ねていき、それによって、私は徐々に、後に私の最も美しい体験の一つとなる、日出づる国に入り込んでいったのだった。(E. L. I: 343)」

また、星製薬株式会社を築き上げ、後に星薬科大学を創立した星一（1873-1951）とエミールの出会いも、ジャワにおける貿易がきっかけであった。

星は、当時マラリアの特効薬として重宝されていたキニーネの原料であるアカキナノキの取引に興味を示していた。「私が出会った時、彼の豊かな頭髪は既に真っ白であったが、東洋の真の実力者であるように感じられた。とても愛嬌があり、私たちは完全に意気投合して、方針は即決した。彼の構想は、自営プランテーションによるキナ樹皮の対日本輸出体制を整え、固定価格による多年契約を締結し、将来的にキナ樹皮の取引を蘭印において成立させることだった。(E. L. I: 344)」

エミールと星は、まず、新しくキナ樹皮の栽培に着手するプランテーションをハラバン地域に築くことで合意し、その後、キニーネ取引に関心を持つオランダの数々の組織との間で大いにビジネスを発展させた。

1923年末には、エミールは三井の税務問題解決に協力した。当時の蘭印に



(写真5：有村貫一とその家族)

において、企業は遡及的法人税法で非常に厳格に管理されており、様々な税務問題が未解決で保留状態のまま年末を迎えていた。「ある日、当時の台湾製糖専務取締役であった山本悌二郎（1870-1937）から電報を受けたスラバヤの三井代表者が、非常に困難な税務問題を抱えて私のところへやって来た。スラバヤの三井は、卸売業者として大戦中に大規模な製糖ビジネスを行っていたが、…（中略）…取引に関する電報や文書は全て東京に送られており、それらは先日の大震災の被害により全て紛失してしまったため、証明が困難になっていた。…（中略）…私は、最高監査役である財務長官を訪ね、交渉にあたった。話し合いは半時間とかからず、私は彼の承諾にこぎ着け、三井に報告することができた。現在、私の自宅には、三井から一連の返礼にと贈られた非常に美しい絹目屏風がある。この、秋の楓、草原の鴨、小枝の鳥たちと晴天の空は、私にとっては自分の名誉のために引き受けただけだった、遠い昔の税務問題解決の日々を思い起こさせるのだった。（E. L. I: 347-349）」

1-4. ドイツ経済界における活動

エミールは、兄カールが政治家であったことから、政府要人とも人脈があっ



（写真 6：右奥から 3 人目がエミール、その隣に座っているのがヒムラー。一番左の笑顔で拍手しているのが、この前年にエミールがフォルスター・ウンゲホイヤーの詩で誕生日を祝ったカール・ヴィンツェントである。）

た。関係の深かった人物の一人に、国会議員であり、ヒトラー総統の経済顧問であったヴィルヘルム・ケプラーがいる。

エミールは、ケプラーが主宰した、ヒトラーに定期的に寄金することを約束したドイツの財界重鎮をメンバーにした秘密組織である「ケプラーの会 (Der Keppler-Kreis)」、後の「親衛隊全国指導者友の会 (Freundeskreis Reichsführer SS)」、別名「ヒムラー友の会」の一員でもあった。この会は毎月第二月曜にベルリンで行われ、親衛隊長官ヒムラーはその度にメンバーの出欠を注意深くメモしていたといわれる⁽¹⁴⁾。

上に挙げた新聞記事の写真は1937年2月9日に撮影されたものとされる⁽¹⁵⁾が、9日は火曜日であることから、月曜の会合が日付をまたいで続行されていたであろうことが予測できる。

メンバーの中には、エミールの他に、ナチ党員でありエミールの兄カールとライヒスバンク総裁の座を巡って対立したヒャルマル・シャハト (Hjalmar Schacht, 1877-1970) や、オットー・フォン・ビスマルク首相の孫であり、ナチ党員から抵抗派に転向したビスマルク＝シェーンハウゼン、そして、ナチスと抵抗派の双方から、その財政専門家としての手腕を買われて期待された銀行家のカール・ブレッシング (Karl Blessing, 1900-1971) などがいた。このグループは、親衛隊高級将校の名誉称号や親衛隊の管理下にある強制収容所からの労働力の提供と引換えに年々多額の親衛隊への寄金を行ない、それが、武装親衛隊の装備や、その他、ヒムラーが正規の予算からの支出をあてにできない諸事業のための資金にあてられた。この寄金総額は、1940～44年の時期で毎年約100万ライヒスマルクであった⁽¹⁶⁾。

なお、筆者が調べた限りにおいて、ナチス親衛隊が創設された当初から海外駐在の長かったエミールが、果たして親衛隊が数々の絶滅収容所の組織や大量虐殺に携わっていたことを当時から認識していたのか、或いは、それらを知りながらも寄金を行っていたのか、という点は現時点において検証されていない。

後述する1940年における、エミールにとって二度目となる訪日時の日本側の報道を見ると、エミールは「ヒトラーの密使」或いは「ヒトラーの経済顧問」等として紹介が為されている⁽¹⁷⁾。第二次世界大戦当時の日本において、エミ-

ルの社会的位置付けとしては、ドイツ経済界の要人であり「ヒムラー友の会」の一員として、ヒトラー側近の一人であるという認識が為されていたことが窺える。

2. 訪日記録

エミールの自伝 *“Ein Leben”* I, IV, V には、二度に亘る訪日記録の詳細が本人の言葉で綴られている。ここでは、自伝の記述をもとにエミール個人の日本観を中心的に取り上げる。

2-1. 1924年の訪日

「1923年の春、日出づる国から再び私に日光が射した。日本最大の砂糖会社である大日本製糖株式会社が、中部ジャワ州ゲダレンにおける砂糖栽培会社の全株式を取得し、私に商品の監督を依頼してきたのだ。(E. L. I: 357)」これをきっかけに、エミールは監督者として大いに活躍し、栽培や輸送、工場施設の向上に貢献した。様々な計画や見積もり費用などの連絡のために東京と書簡や電報のやり取りを行っていた時、大日本製糖社長の藤山雷太(1863-1938)により、最終会議のために東京へ招待された。「それは1924年の春だった。ちょうどハンブルクからも呼ばれていたこともあり、私はこの招待を受け入れることにして、東京—アメリカ経由で帰国することに決めた。(E. L. I: 364) ⁽¹⁸⁾」

「1924年5月上旬、アメリカ海軍哨戒艦艇ティソンダリ(Tjisondari)号にてパタヴィア(現ジャカルタ)を出港、ジャワ—中国—日本航路を香港へと進む。(E. L. I: 366)」という文に続き、人生初となる極東への旅に心躍らせている様子で、船上の様



(写真7: 藤山雷太)

子や景色について綴っている。船上では三井の社員と交流したり、寄港地である香港のレパルスベイ、上海の外灘などの観光を一緒に楽しんだりしたようだ。エミールの初回の訪日記録を読む限り、本人は始終リラックスした様子であり、緊張感はまったく感じ取れない。三井の社員から、レパルスベイでの会食の際に何を飲みたいか尋ねられたところ、「私はドイツ人だからね、我々ドイツ人はビールに決まっているんだ。」と答え、それに対しビール瓶を指して「ヘルフェリッヒさんのお友達が、ボトルの中でお待ちですよ。」と返されたこと、その翌朝の朝食でもドイツビールが用意されており、「ほら、またヘルフェリッヒさんのお友達ですよ！」と冗談を言われ、朝からビールを嗜んだ事などが愉快に綴られている（E. L. I: 366-367）。上海で一泊した後、神戸へ向かった。

神戸港に到着した時の日本の第一印象について、次のように綴られている。「日本だ！6月上旬のある午後、神戸に到着した。海、空、そして大地のすべてが、それぞれ異なった色合いで日光と共にシルバーグレーに輝き合い、その情景はまるで日本の繊細な絹の刺繍のようであった。（E. L. I: 367）」これは、かつてエミールが三井から礼品として贈られたという、絹目屏風の刺繍のことを言っているのであろうか。また、エミールは、神戸港の入管職員の誰しもが西洋スタイルの制服を着用し、白い手袋をつけていた事、このスタイルがその後日本のどこでも見受けられたことが非常に印象強かったようだ。

神戸港では、勅選貴族院議員を務め、東京商業会議所（現・東京商工会議所）会頭であると同時に日本商業会議所（現・日本商工会議所）連合会会頭を務めている藤山雷太と秘書の大杉が出迎え、大阪ホテル（1924年11月16日、火災により焼失）へと向かった。当時としては、エレベーター付きで西洋スタイルのモダンなホテルであったが、エミールは大阪ホテルを評して「鏡の前に立っても、ベッドに横になっても、まるで小人の世界に来てしまったのか、或いは私はたった一晩で背が伸びたのかと思ったほどだ。」と述べている（E. L. I: 367）。

エミールは、この初訪日の初日が「最も日本的に感じられた」として印象を述べている。「夜になり、大杉氏と共に街に繰り出すと、これまで自分の中で妖精人形でしかなかった日本女性が現実となったのだ。通りを行き交う小さ

な日本女性たちが、天の香りを漂わせ、木製の下駄でもって音楽を奏でており、それと同時に、着物から唯一裸出している首元は美しさを際立たせ、また彼女らの小さな漆黒の瞳が美しく輝いている。華奢な腰を支えるための帯、そして重く結われた髪型が非常に鮮やかであった。(E. L. I: 368)」

「翌日、列車で東京へと向かう中で、日本の礼儀を見る機会があった。禁煙車両で見られた表示は、禁煙であるにもかかわらず“禁煙”ではなく“喫煙はお控えください”とあり、車内トイレに腰掛けると、向かいの壁には“お待ちのお客様のためにお早ようお願いいたします”とあった。私は深くお辞儀をして、努めて急いでトイレを出たのだった。(E. L. I: 368)」

東京駅に着くと、そこには代表団が待っていた。藤山雷太の養子であり、大日本製糖社長である伊吹震(1888-1961)、台湾製糖株式会社代表の中村と、休暇で帰国していた有村貫一がエミールを出迎えた。「帝国ホテルへ案内されると、我々のために素晴らしいスイートルームが用意されていた。ホテルに向かう途中では、この昨年9月に東京で起こった未曾有の地震による被害の爪痕が見受けられた。丸の内地区では、鉄筋コンクリート製の高層ビルのみが残され—それは日本らしからぬ光景であったが—、それらは無傷であるか、あるいはひび割れがあるのみであった。なお、帝国ホテルはアメリカの指導の下、耐震構造にされていたためまったく無傷であった。(E. L. I: 370)」この後日も、エミールは再び都内を移動する際に震災被害を目の当たりにする機会があり、中村から被害の詳細を聞かされた。後述するエミールの遺品コレクションのなかには、大阪毎日新聞社から出版された『關東震災画報』および『關東震災画報第二版』が残されている。

「翌日、藤山雷太殿により、息子の愛一郎、養子の伊吹がいる都内の個人宅に招待された。藤山氏は日本語しか話さなかったが、秘書の大杉氏が通訳となった。我々は簡単な自己紹介の後、日本晴れの下でシェリー酒と肴を楽しんだ。…(中略)…日本人たちも、私が彼らを気に入ったことが解ったであろう。これは信頼関係を築くためには大前提だ。反対に、日本人が愛想良いにも関わらず上手く溶け込めない西洋人たちもいるが、結局のところ、そういう西洋人というのは日本人(原文:“Japsen”)に偏見を抱いているのだ(E. L. I: 370)。」

藤山の邸宅には藤山自身の銅像があったが、これを見たエミールは、「なぜ日本人は、要人になるほど、我々にとっては既に流行遅れの、そして足の短い日本人には似合わない西洋スタイルを好むのか。日本人のシンプルな和装にこそ、我々西洋人がどれだけ感動させられることか！それとも、日本では和装は既に古臭いものになっているとでもいうのだろうか。(E. L. I: 370-371)」と評している。これと同様、エミールの日本滞在中、当時の裕仁皇太子が、結婚関係のイベントで大衆が見守る中を皇居へ向かう場面に遭遇する機会があった。日本の皇太子が通りかかると聞いたエミールは期待を膨らませて待ち構えていたが、いざ、その姿が現れると想像していたのとはまるで違い、完全に西洋スタイルの制服を着用した騎兵隊に続いて、リムジンに乗った裕仁皇太子も同じく西洋スタイルの身なりであったことに非常に驚き、がっかりさせられたという (E. L. I: 381-382)。

翌日、山本悌二郎とは、まるで旧知の仲であるかのような対面を果たし、藤山や有村を交えて南国および三井とのビジネス会議を行った。

後日、山本により、エミールとパートナーのディーナは初めて芸者を交えた会食に招待された。通常、このような宴は男性向けの場であることから、ディーナにとっては特別で貴重な体験であった (E. L. I: 373)。



(写真 8: 芸者たちとの会食。前列中央の日本人女性の向かって左がエミール、向かって右がディーナ)

「日本の茶屋あるいは食事処を訪れたのはこの時が初めてだったが、長くジャワに居住していた我々にとっては、その暗い屋根の突き出た低い木造の造りに大変親しみを覚え、友好的に感じられた。建物は密になった低木の奥にあり、石板で造られた狭い小道が入口に通じていた。そこでは、二人の芸者—二人の妖精が、深々と腰を曲げて我々に歓迎の挨拶をし、子供のようなあどけない笑顔で我々の来訪に喜びを示した。玄関では靴を脱ぎ、室内履きを渡された。日本はこの点において、教会や自宅でさえ街路と同じように汚してしまう我々ヨーロッパ文化より一歩進んでいると感じる。ここ



Dr. Teijero Yamamoto als Landwirtschaftsminister mit Gattin

(写真9：農林大臣 山本悌二郎夫妻)

日本では、引き戸で仕切られた明るい部屋の、葦で造られた輝く畳の上に綺麗な足であがるのだ (E. L. I: 373)。」

後日、エミールは藤山雷太の仲介により、大倉喜八郎や渋沢栄一と会食する機会を持った。特に渋沢とは通訳を介さずにフランス語で交流したといい、「出会った日本人のなかで最も印象的だった人物」として、日本の産業王である渋沢を挙げている (E. L. I: 377)。

また、星一と再会して製薬工場を案内してもらったり、日本のドイツ学校や、銀座、奈良、京都、横浜、日光、靖国神社などを案内され、それぞれ回想を綴っている。その他、印象的だった事の一つとして、東京で人力車に荷物を置き忘れたまま降りてしまったところ、その荷物が数時間後には宿泊先の帝国ホテルへ届けられており、日本人の正直さに感動した思い出を挙げている (E. L. I: 383)。

日本で数々の歓待を受けたエミールは、返礼に、バタヴィアから持参した資料を講義形式にまとめたものを東京で講演したいと申し出た。藤山と山本によって快諾され、日本経済聯盟會により「蘭印における外国資本投資」と

題した講演が日本工業倶楽部において開催された (E. L. I: 383)。

最後は、藤山父子や山本夫妻などを交えた送別会に続いて、中村と有村貫一に見送られながら横浜港を後にした。当時、「日本を発つ船から富士山が見えれば再び日本へ来れる」というジンクスがあったらしく、霧の中、ディーナと2人で必死に富士山の方角を眺め続けたところかすかにその姿が見えたようだ (E. L. I: 387) ⁽¹⁹⁾。

その後、カナダからアメリカを横断し、フランスを経由して帰郷した。

2 - 2. 1940 年の訪日

エミールの自伝 “*Ein Leben V*” の冒頭部分では、26 ページに亘って、シベリア経由での旅路が「旅行スケッチ」と題されて綴られている。ハンブルクを出発して、1940 年 1 月 21 日にはベルリンを離れ、リトアニア、ラトビアのリガを経て旧ソ連に入り、モスクワから各地を経て旧満州国に入り、満州里、ハルビン、長春 (原文: Hsinking)、瀋陽 (原文: Mukden) まで、各停車駅周辺の様子や、各土地での飲食を楽しんだ記録が詳述されており、一つの読み物として非常に興味深い。その一方、今回の訪日は歴史的背景もあって 1924 年時と比較して政治色が非常に強く、日本入りしてから後の記録からは緊張感が伺える。

この前年の秋、エミールは、その当時親衛隊名誉大佐でありヒトラー内閣外相となったリッベントロップ (Joachim von Ribbentrop, 1893-1946) より呼び出され、外務省としての写真撮影が行われた。リッベントロップは、当時ドイツが置かれた状況から、日本との友好関係を回復することの重要性をエミールに力説した。エミールに課された使命は、主に次の二点であった。一つは、日独間の経済界の連携強化であり、もう一つは、満州国の大豆および東南アジアの産物を、日本経由でシベリア鉄道を通じて輸送するルートの確立であった。 (E. L. IV: 158-159)

「私は、まず母国に対する愛国心から、そして与えられた特別な使命に対して期待に応えてみたいと思う気持ちもあり、引き受けることにした。私が提案したのは、公式的に訪日するのではなく、ハンブルク東亜協会会長として、前回の訪日でやり取りのあった満州国および日本の代表と交渉にあたる計画



Vortrag im Industriellen Klub in Tokyo am 12. März 1940

(写真 10：1940 年 3 月 12 日、日本工業倶楽部での講演の様子)

で、それが承認されて決定した。(E. L. IV: 159)」

1940 年 3 月 12 日、日本経済聯盟會による依頼講演「独逸における経済指導と能率増進」を日本工業倶楽部で行った。

3 月 15 日に東京を離れて神戸—大阪へ向かった。エミールによれば、「東京は堅苦しい所で、神戸や大阪は温かい」そうで、当時の大阪・神戸ドイツ総領事館と神戸におけるドイツ人居留地代表団が招待してくれたことは大きな喜びであった (E. L. IV: 169)。

大阪では、府立大阪医科大学（現・大阪大学医学部）学長で、ドイツでも学んだ佐多愛彦教授との交流を楽しんだ。エミールは佐多について、「高潔な医者であり、自らが医学を修めたドイツのために心から便宜を図ってくれる。それも、医者としてではなく、人として。」と評している (E. L. IV: 169-170)。また、エミールは、佐多の研究が 1899 年にドイツでも出版されたこと、加えて、日独文化協会会長でもあり、日独文化関係に関する 2 度の講演が 1927 年に出版されたことを称賛している。後述するエミールの遺品のなかにはこれらの



Abschiedsempfang in der Deutschen Botschaft in Tokyo am 8. April 1940
 V. l.: Außenminister Arita (sitzend), Botschafter Ott (stehend), Helfferich und
 Botschafter a. D. General Oshima (sitzend)

(写真 11: 1940 年 4 月 8 日、東京ドイツ大使館での送別会。テーブル席の向かって左から、山本悌二郎の実弟で米内内閣外相の有田八郎、隣に立っているのがオット駐日大使、エミール、駐独大使の大島浩)

著書も見受けられる。

その後、大阪方面でも数々の職務上の予定をこなし、再び東京へ戻った。4 月 7 日、かつての“若き友人”であった有村に案内されて、藤山雷太と山本悌二郎、そして渋沢栄一の墓前に花を添えた (E. L. IV: 182)。渋沢の孫である渋沢敬三は、祖父による 2 冊の漢詩をエミールに贈っている⁽²⁰⁾。

翌 4 月 8 日、時の内閣総理大臣米内光政により叙勲（勲二等瑞宝章）⁽²¹⁾。同日には東京のドイツ大使館での送別会に先立って講演「未来における世界経済問題」を行った (E. L. V: 50-55)。

4 月 11 日、東京を発つ日の朝、エミールはドイツ大使館へ出向いて最後の挨拶を交わし、大使とは互いに記念品を交換したが、こんな回想をしている。「大使館というのは、中から周辺からまるで裁判所のような空気が漂っている。冷ややかで表面的で堅苦しく、生きた心地がしないところだ。大使はま

あ良くやってはくれたのだが、彼も他の人間と同様、立場に囚われたままの人間であった (E. L. IV: 185)。」

「午後3時の列車で東京を後にした。ホームには、見送りの人々が75人も集まってくれた。駐日大使、在日ドイツ人たち、武者小路子爵（元駐独大使）、日銀の結城総裁、横浜正金銀行の大久保頭取および柏木副頭取、多くの大臣たち、星一、そして有村、バタヴィアの小谷総領事代理、ベルリン日本大使館のアレクサンダー長井夫妻と娘もいた。辺りは人々の木製の下駄が軽快に鳴り響いていた。列車が動き出す。目頭が熱くなった。皆、私に深々とお辞儀をしていた。Arigato! Sayonara! (原文ママ)」(E. L. IV: 185-186)

筆者が調査した限り、1924年の初訪日についてリアルタイムの報道記録は日独双方に見当たらない。一方、1940年の二度目の訪日については、日本到着時から帰りの送別会に至るまで、日本側の数々の報道で盛大に取り上げられていた。但し、いずれも政治的な報道に終始していることから、ここでは掲載日時、掲載紙、見出しのみを記載するに留める。

- ・ 1940年2月14日 読売新聞7面 ヒ総統の密使か、ヘ氏秘かに都入り
- ・ 1940年2月22日 報知新聞 日獨枢軸強化か 獨逸使節相次ぐ来朝に笑止や佛が大恐慌
- ・ 1940年3月3日 読売新聞7面 獨經濟代表の歓迎會
- ・ 1940年3月26日 大阪毎日新聞 獨逸經濟使節を送る
- ・ 1941年2月18日 読売新聞2面 「日獨經濟委員會」民間、懸案具体化急ぐ

1970年、ハンブルクを離れて故郷ノイシュタットに戻り、ヘルフェリッヒ遺品財団を設立して遺品の管理を委託した。1972年5月22日早朝、自宅にて永眠。94歳であった。エミールは1939年夏に逝去したパートナー、ディーナが眠る市内の墓地に共に埋葬された⁽²²⁾。

エミールの遺品には、インドネシアをはじめとする数多くの東洋コレクションが残されている。当初はノイシュタット市内で保管されていたが、1997年より、ルードヴィヒスハーフェン経済大学東アジアセンターに貸与された。ここでは、日本コレクションに限定して考察する。

3-2. 日本美術品

筆者が調査した限り、少なくとも2点に、浮世絵専門の画商として明治末期に創業した渡邊版画店（現・渡邊木版美術画舗）の印章が見受けられた。写真を撮って先方に問い合わせたところ、この2点は真作である可能性が極めて高いことがわかった。三代目の渡邊章一郎によれば、一点は川瀬巴水（1883-1957）による《伊豆堂ヶ島》で、昭和12年の作品である。もう一点は、浮世絵師であった月岡芳年（1839-1892）の孫にあたる月岡玉瀨（1908-1994）の作品《西王母》で、昭和13～16年頃に制作された。



（写真12：川瀬巴水《伊豆堂ヶ島》）



（写真13：月岡玉瀨《西王母》）



(写真 14: 竹内栖鳳?)

次に、実物の落款を見る限りでは「栖鳳住於東山艸堂」と書かれている扇絵があり、京都の東山艸堂を自らのアトリエにしていた竹内栖鳳（1864-1942）の作品ではないかと推測される。

しかし、写真を専門家に送って問い合わせたところ、栖鳳は贋作も数多く出回っているため、実物を手に取らなければ正式な鑑定は不可能との回答であった。

さらに、審美書院印刷の「古代名画選 (JAPANESE OLD MASTERPIECES)」と書かれた箱には A3 サイズの浮世絵が 10 枚あり、裏面にはそれぞれ番号が割り振られている。

A No.10 炎摩天 (10 世紀)

A No.13 信實筆 (1178-1265)

A No.38 芳園筆 (1804-1867)

A No.40 抱一筆 (1761-1828)

D No.6 春章筆 (1726-1792)

D No.34 長陽堂筆 (18 世紀)

D No.40 長春筆 (1682-1752)

D No.44 長春筆 (1682-1752)

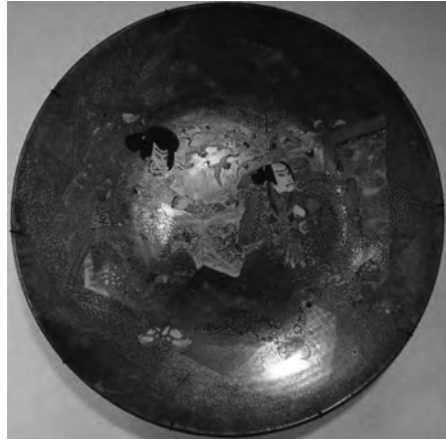
D No.66 一蝶筆 (1652-1724)

(一枚は番号等の判読不能、写真を左に挙げた。)



(写真 15: 審美書院印刷・古代名画選より)

また、右に挙げた写真のとおり、直径 40cm 程度の赤茶色で金色を帯びた薩摩焼があるが、作者や制作時期などの詳細は不明である。この他にも大小の陶磁器が複数あるものの、外見からは日本のものなのかそれ以外の国のものなのか判別が困難であるため、これら史料の価値の検証については、今後しかるべき専門家が調査にあたる必要がある。



(写真 16：薩摩焼)

その他、日本のものである可能性が高いものを挙げると、福祿寿の人形、鳥居の置物、そして、エミールが訪日中に実際に利用し、その印象と思い出を自伝に綴っている人力車の置物が 2 点ある。また、少なくとも日本画がもう一点、日本の掛け軸も 2 点あるが、具体的な作者などの特定には至らなかった。加えて、兄カールも大正期に訪日しており、カールより送られた日本各地の景観をはじめ、和装で日本髪を結った女性、和傘を差す女性、和装の男性、河原で遊ぶ子供たち、第一回国勢調査記念画などのカラー刷り絵葉書が 30 枚ほど残されている。

3 - 3. 日本関係書籍

遺品コレクションのうち、書籍（画集、写真集を含む）は約 2000 点に及ぶ。筆者が調査したところ、そのうち日本関係のものは少なくとも 140 点以上が認められた（筆者が作成した日本関係書籍リストを資料として末尾に掲載した）。

著名なものには、ケンペル、岡倉天心、小泉八雲、永井荷風などの著作の他、万葉集、信貴山縁起絵巻、葛飾北斎の画集などがある。また、本人と直接交流があったと思われる日本人、およびドイツの日本研究者の著書も数多く見受けられる。戦後も、川端康成による『雪国』、『千羽鶴』などの著名な日本文学に関心を抱いていたようだ（日本関係書籍は大部分がドイツ語あるいは英語である）。

この他、1939 年開催の伯林日本古美術展覧会記念図録上下巻があるが、残念ながら、展覧会に対するエミールの感想や考察には辿り着くことができなかった。

エミールの自伝 “*Ein Leben V*” 最終章には、1950 年に東亜協会 50 周年を記念して執筆されたエミールの評論を元にした記事が掲載されている。そこでは、ドイツと東亜の経済関係の歩みとともに、ドイツにおける日本学研究の概要、オットー・キュンメルを初めとする東洋美術研究に携わった人物とその功績などが紹介されており、遺品の日本関係書籍リストの中からは Wilhelm Gundert, Günter Wenck など、何名かの著者と功績も紹介されている (E. L. V: 223-229)。

結

日独双方において、エミールに関する報道は、政治的あるいは経済的分野での評価しか為されていなかった。本人の言葉で記録された自伝にはあるような、世界を陸路や船で巡った旅、各地での異文化交流を楽しんでいた側面、日本人および日本文化理解、日本美術品への関心について論じられたものは見当たらない。また、本人を直接知る存命の親族に、生前のエミールの日本観および日本美術品への考察について書簡でインタビューを申し入れたところ、「問い合わせ出来る限り他の親族たちにもあたってみたが、あなた（筆者）の質問に答えられる者はいなかった」という回答であった。

冒頭でも述べたとおり、ナチスの負の遺産は今なお欧州において強く敬遠され、またナチスによる数多くの美術品略奪の事実も存在することから、元ナチス関係者、あるいはその美術品コレクションを研究材料とする場合には複雑な諸問題が絡んでくる。しかしながら、エミールの人生を、彼の日本観に集中して辿ることで、政治的歴史的側面からの考察だけでは見えてこなかった新たな可能性を見出すことができた。それは、20 世紀前半に生きた一人の貿易商が、新たな世界としての日本の芸術や文化に出会った感動と興奮を、純粋な美術的視点で、かつ、生き生きと表現した記録であった。

彼は、「戦前ドイツにおける経済界の要人」或いは「ヒムラー友の会の一員」

という評価に留まる人物ではなく、世界を駆け巡った貿易商であり、また、東洋美術品コレクターでもあった。この世に生を受けた時代背景のため、当時の政治事情に影響を受けざるを得なかったエミール・ヘルフェリッヒのような人物を、政治学的観点から離れて、国際日本学、あるいは美術史など他分野の研究対象とすることは大いに価値があるだろう。

註

- (1) 筆者による修士論文『ローレンス・ビンヨンと日本—日本美術への眼差し』法政大学大学院 (2008 年) で詳述している。
- (2) 安松みゆき『1939 年開催の「伯林古美術展」をめぐる 2 点の日本絵画』別府大学、2000 年、143 頁。
- (3) 矢代幸雄『日本美術の恩人たち』文芸春秋社、1961 年、127 頁。
- (4) (矢代 1961: 134)
- (5) 安松みゆき『ナチス・ドイツと (帝国) 日本美術—歴史から消された展覧会』吉川弘文館、2016 年、36 頁。
- (6) (安松 2016: 245)
- (7) 日本におけるエミール・ヘルフェリッヒに関係する資料として一番古いものは、エミール著作の邦訳：村岡尊朝『海外企業銀行としての蘭領印度拓殖銀行の研究』糖業聯合会 (1921 年) である。次に、1920 年 10 月 7 日にハンブルク地学協会で行われたエミールによる講演の邦訳：後藤改平『蘭領印度の経済』南陽協會臺灣支部 (1922 年) があり、続いて、1940 年 3 月におけるエミール訪日時の講演の邦訳『獨逸における経済指導と能率増進』日本経済聯盟會 (1940 年) がある。また、山口定著作『ナチ・エリート—第三帝国の権力構造』中公新書 (1976 年) にはエミール・ヘルフェリッヒの名前が出てくるが、以上はいずれも経済学あるいは政治学研究の域を出ないものである。
- (8) Viktor, Carl: *LEXIKON DER PFÄLZER PERSÖNLICHKEITEN*, Hennig, Arwid; 2., aktualis. Aufl. Edition, 1998, S. 244. 現プファルツ地域は第一次大戦後まではバイエルン王国属領であった。本論において、以下、和訳は筆者によるものである。
- (9) インドネシアにおける兄弟での活動の一例として、あとがきも参照されたい。
- (10) 死亡届を見ると、生涯婚姻の記録がなく、法的に認められる子もない。
- (11) エミールの生家には現在も親族が居住しているため、ここでは出典の紹介に留める。
= 写真典拠 1
- (12) Helfferich, *Emil: Ein Leben. Band I-III*, Dulk, Hamburg 1948.
Ein Leben. Band IV-V, Bei C. L. Mettcker und Söhne, Jever 1964.
なお、以下、エミールの自伝からの引用は本文中に略記 (E. L.: S) の形で表記する。
- (13) スマトラ島における唐辛子取引事業、チコポ (Cikopo) 村における弟テオドルとの茶農園事業などが挙げられる。
- (14) 山口 定『ナチ・エリート—第三帝国の権力構造』中公新書、1976 年、245 頁。
- (15) = 写真典拠 6
- (16) (山口 1976: 246)
- (17) 読売新聞 1940 年 2 月 14 日朝刊 7 面、神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫 外交 (151-097) 報知新聞 1940 年 2 月 22 日 (昭和 15 年)。
- (18) この直後の 4 月 24 日、兄カールと母が列車事故で急死し、訃報を受けたエミールは非常に強い衝撃を受けた。兄と母を偲び、「回り道をやめて直帰したかったが、

既に5月上旬の日本経由での帰国が決まってしまう、変更できなかった」と回想している (E. L. I: 364)。

- (19) オランダ出身の画家であり、エミールと共にその生涯を歩んだディーナは1939年8月に亡くなったため、二度目の訪日同行は叶わなかった。ここに、「私はたった一人で日本へ戻る運命にあった (E. L. I: 387)。」とだけ綴られている。
- (20) 原文では“Kaigo Shibusawa”となっているが、この人物が「渋沢栄一の孫であり、子爵位を継いだ」とあることから、渋沢敬三のことであると思われる。
- (21) 独国人「エミール・ヘルフェリヒ」叙勲ノ件『叙勲裁可書 昭和十五年 叙勲卷二十 外国人』国立公文書館、1940年4月5日。
- (22) エミールの両親や兄弟をはじめとする一族が共に眠る、壮麗なヘルフェリッヒ家の墓からは少し離れた場所に2人の墓がある。あとがきも参照されたい。

写真典拠

1. Generaldirektion Kulturelles Erbe Rheinland-Pfalz, Direktion Landesdenkmalpflege (Hrsg.): *Denkmaltopographie Bundesrepublik Deutschland. Kulturdenkmäler in Rheinland-Pfalz, Band 19,1: Stadt Neustadt an der Weinstraße, Kernstadt* (bearb. von Michael Huyer), Worms 2008, S. 277.
2. *Ein Leben I*, S. 20.
3. 筆者撮影
4. 提供: Weingut Acham-Magin, Weinstraße 67, 67147 Forst an der Weinstraße, Pfalz, Germany
なお、ウンゲホイヤーも生産しているこのワイナリーは1712年創業である。
5. *Ein Leben I*, S. 342.
6. *DIE ZEIT* Nr.40, 29. 09. 2011, S. 21.
7. *Ein Leben I*, S. 372.
8. *Ein Leben I*, S. 374.
9. *Ein Leben I*, S. 380.
10. *Ein Leben V*, S. 48.
11. *Ein Leben V*, S. 50.
- 12.-16. 提供: Ostasieninstitut der Hochschule Ludwigshafen am Rhein (筆者撮影)

遺品コレクション日本関係書籍リスト ※【 】内は筆者による補足・備考

Nr. Autor / “Titel/Zeitschrift” / Verlag / Jahr 【補足・備考】

1. H.S.M. Van Wickevoort Crommelin “*Een Herlevend Volk: Schets Van de Japanners En Hun Land*” Haarlem H.D. Tjeenk Willink, 1895
2. Sata, Prof. A. “*Über die Bedeutung der Mischinfektion bei der Lungenschwindsucht*” G.Fischer Verlag, 1899 【佐多 愛彦】
3. Stratz, Dr. C.H. “*Die Körperformen in Kunst und Leben der Japaner*” Ferdinand Enke, Stuttgart, 1902
4. Clarence Ludlow Brownell “*Japanische Charaktertrekken*” Rotterdam: Nijgh & Van Ditmar, 1905
5. Munzinger, Carl “*Japan und die Japaner*” Verlag von D. Gundert, Stuttgart, 1906
6. Imperial Government Railways “*Japan*” Traffic department, Imperial Government Railways, 1914 【Travellers' Handy Guide 鉄道省】
7. Smidt, Dr. H. “*Japan im Weltkriege und das Chinaproblem*” Verlag Franz Leuwer, Bremen, 1915
8. Westedt, Wilhelm “*Zur Kriegszeit um die Welt: Zehn Monate im feindlichen und*

- neutralen Auslande*" Hesse & Becker Verlag, Leipzig, 1916
9. Crow, Carl "Japan and America" Robert M. McBride & Company, New York, 1916
 10. H.H. van Kol "Japan indrukken van Land en Volk" W.L. & J. Brusses's uitgevers maatschappij, Rotterdam, 1917
 11. an ex-counsellor of legation in the far east "The Problem of Japan" Langenhuysen, C.L. van, Amsterdam/Rotterdam, 1918
 12. Clement, E. W. "A Short History of Japan" The University of Chicago Press, 1920
 13. H.H. van Kol "Oud en Nieuw Japan grepen uit het leven" W.L. & J. Brusses's uitgevers maatschappij, Rotterdam, 1921
 14. 村岡尊朝『海外企業銀行としての蘭領印度拓殖銀行の研究』糖業聯合會、1921年。【エミール著作の邦訳。エミールの筆跡で「親愛なる母へ 1921年クリスマス」とある。】
 15. Fujisawa, Rikitaro "The Recent aims and political Development of Japan" Yale University Press, 1921【藤沢 利喜太郎（日本語原著あるいは邦訳なし？）】
 16. Klemann, Friedr. "Japan wie es ist" R. Voigtländer Verlag in Leipzig, 1921
 17. Hearn, Lafcadio "Das Japanbuch" Rütten & Loening a.M. 1921【『小泉八雲全集』】
 18. Okakura-Kakuzo "The Awakening of Japan" John Murray, Albemarle Street, London, 1922【岡倉 角蔵『日本の覚醒』】
 19. Okakura, Kakuzo "Die Ideale des Ostens" Im Insel Verlag zu Leipzig, 1922【岡倉 角蔵『東洋の理想』】
 20. Young, Robert "What They Read in Japan" 出版社不明 1922
 21. Scott, J. W. Robertson "The Foundations of Japan" John Murray, Albemarle Street, W., London, 1922
 22. "Earthquake Pictorial Edition: Part one" The Osaka Mainichi, 1923【大阪毎日新聞社『關東震災画報』第一輯】
 23. "Earthquake Pictorial Edition: Part two" The Osaka Mainichi, 1923【大阪毎日新聞社『關東震災画報』第二輯】
 24. 武信由太郎 "The Japan Year Book" 英文日本年鑑社 1923
 25. 小谷淡雲 "De Ranryo-Indo-Jiho" 南陽協會爪哇支部、1924年。【『蘭領印度時報』一月號。38 - 40頁にかけて、エミールによる前年の回顧談「蘭印の經濟狀態」が掲載されている。】
 26. Forest, Ellen "Yuki San" W.L. & J. Brusse's Uitgeversmaatschappij, Rotterdam, 1926【著者はオランダ人作家、夫が日本学博士（ライデン大学）の Jan Lodewijk Pierson jr.】
 27. Robert Schinzinger / Alfred Amonn "Japanisch-Deutscher Geistesausch, Heft 3" Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, Tokyo, 1930
 28. Bälz, Erwin "Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan" J. Engelhorn's Nachf. Adolf Spemann Stuttgart, 1930【Bälzの妻・荒井花子、長男・徳之助、長女・ウタの写真が掲載されている。なお、最後頁には、エミールの筆跡で英単語リストがびっしり書かれてあるが、内容との関連は不明】
 29. "Japan" Tokyo Asahi Shimbun, 1932【東京朝日新聞社】
 30. Mitsui Gomei Kaisha "The house of Mitsui: a record of three centuries" Mitsui Gomei Kaisha, Tokyo, 1933【三井合名会社】
 31. The Japanese Government Railways "An official guide to Japan" printed in Japan, 1933【a handbook for travellers 地図付、鉄道省】
 32. Kämpfer, Engelbert "Seltsames Asien" Verlag der Meyerschen Hofbuchhandlung,

- 1933【ケンペル『廻国奇観』】
33. Murakami, Dr. Komao *"Das Japanische Erziehungswesen"* Verlag Fuzambo／富山房 1934【村上 瑚磨雄『日本の教育制度』】
 34. *"Das Japanisch-deutsche Kulturinstitut: seine Aufgabe und Tätigkeit"* Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, Tokyo, 1934
 35. Yukio, Yashiro *"Einführung in die japanische Malerei"* Japanisch-Deutsches Kultur-Institut, Tokyo, 1935【矢代 幸雄『日本画入門』】
 36. Gundert, Wilhelm *"Japanische Religionsgeschichte"* Für Japan, Mandschukuo, China: Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, Tokyo. Für Deutschland und die übrigen Gebiete: D. Gundert, Verlag, Stuttgart, 1935【Ein Leben V, S.223 で言及あり。1943年に著者からエミールに贈呈されている。表紙裏に著者による長文メッセージ有。】
 37. Bohner, Hermann *"Jinnō-Shōtō-Ki, Buch von der Wahren Gott-Kaiser-Herrschafts-Linie"* Japanisch-Deutsches Kultur Institut, Tokyo, 1935【北畠親房『神皇正統記』の独訳本】
 38. Fujihara, Ginjiro *"The Spirit of Japanese Industry"* The Hokuseido Press, Tokyo, 1936【三井財閥 藤原 銀次郎『工業日本精神』英訳版。著者からの贈呈品。】
 39. Thiess, Frank *"Tsushima"* Zsolnay Verlag, Berlin, 1936【日露戦争中の日本海海戦をテーマにした小説。英訳版題名：The Voyage of Forgotten Men】
 40. Wilhelm Komakichi von Nohara／野原駒吉 *"Japan Zoöals Het is"* Nederlandsche Keurboekerij, Amsterdam, 1936
 41. Abegg, Lily *"Yamato: Der Sendungsglaube des japanischen Volkes"* Societäts-Verlag, Frankfurt am Main, 1936
 42. Weissing, Helmut *"Das japanische Preiswunder"* Hans Köhler Verlag in Hamburg, 1936
 43. 徳富蘇峰先生文章報國五十年祝賀會『蘇峰先生著作五十選』光村原色版印刷所、1936年。【蘇峰の印鑑及び直筆サイン有。非売品】
 44. Kamesaka *"The Who's Who in Japan"* フーズ・フー・イン・ジャパン社 1937【亀坂 常三郎『英文日本人名録』1937】
 45. Hoshi, Hajime *"Japan – A Country founded by „Mother“"* The Columbia University Club in Tokyo, 1937【星 一『日本略史「お母さん」の創った日本』の英訳版。1940年5月10日付の著者直筆サイン及びメッセージ有。】
 46. Obata, Kyugoro *"An Interpretation of the life of Viscount Shibusawa"* Daiyamondo Jigiyo Kabushiki Kaisha Bijutsu Insatsusho, Tokyo, 1937【昭和十五年三月付で著者より贈呈。小畑 久五郎（ - 1942）：渋沢栄一の英訳秘書】
 47. Takakusu, Dr. Junjiro *"Der neue Nipponismus und die Staatsauffassung des Buddhismus"* Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, Tokyo, 1937【高楠 順次郎（1866-1945）】
 48. Hoshi, Hajime *"Japan"* The Columbia University Club in Tokyo, 1937【（重複）『日本略史「お母さん」の創った日本』の英訳版。1940年8月31日付の著者直筆サイン有。】
 49. Hoshi, Hajime *"El Japon"* The Columbia University Club in Tokyo, 1937【『日本略史「お母さん」の創った日本』の仏訳版。1940年8月31日付の著者直筆サイン有。】
 50. 石原毛登馬 *"Nō Sixty Plots"* 中屋三間印刷株式會社、1937年。【能の60曲目の英語解説。非売品】
 51. Jahn, Erwin *"Die deutsche Literatur in Japan"* Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, Tokyo, 1937
 52. *"Japans Reichsentwicklung"* Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde

- Ostasiens e.V. 1937
53. Ueberschaa, Hans *"Die Eigenart der Japaner"* Otto Harrassowitz Verlag, Leipzig, 1937 [sonderdruck aus "Japan und die XII. Olympischen Spiele, Tokyo 1940"]
 54. Piper, Maria *"Das japanische Theater: Ein Spiegel des Volkes"* Frankfurter Societäts-Druckerei GmbH, Frankfurt am Main, 1937 [邦題併記: 『新派歌舞伎文楽』]
 55. Thomas, A.F. *"I speak for Japan"* ゴシ出版社 1938 [発行者: 辻子卯三郎]
 56. Kawai, Tatsuo *"The Goal of Japanese Expansion"* The Hokuseido Press, Tokyo, 1938 [河相 達夫(1889-1966)1940年3月23日、Sumitomo-Haus にて著者からエミールに贈呈された。]
 57. Tomoeda, Takahiko *"Japan und Deutschland"* Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, Tokyo, 1938 [友枝 高彦 (1876-1957) 『日独文化交渉史の回顧』独訳版]
 58. Tomoeda, Takahiko *"Meiji Tenno – Bushido"* Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, Tokyo, 1938 [友枝 高彦]
 59. Tomoeda, Takahiko *"Toyotomi Hideyoshi: zum Besuch der Hitlerjugend in Osaka"* Japanisch-Deutsches Kulturinstitut, Tokyo, 1938 [友枝 高彦]
 60. Japanese Government Railways *"Souvenirs – What and Where"* Board of tourist industry, Tokyo 1938 [鉄道省]
 61. Government-General of Tyosen *"Annual Report on Administration of Tyosen"* Toppan Printing. Co., LTD, Tokyo, 1938 [中表紙に、"Dr.Otto Richter Hamburg 13 Schlüterstr. 14, Tel. 44 69 21" の判子有]
 62. Fukukita *"Cha-no-yu"* The Hokuseido Press, Tokyo, 1938 [1940年4月6日付で、著者・福喜多 靖之助 (1874-1944) の直筆サイン有。戦前と戦後で4版有り]
 63. Dirksen, Herbert von *"Briefe aus Japan"* Als Handschrift gedruckt, 1938
 64. Kunze, R *"Praktisches Zeichenlexikon, Chinesisch-Deutsch-Japanisch. 6000 Zeichen Etymologisch Erklärt mit Neuem Praktischem Schlüssel"* Selbstverlag des Verfassers, Nagoya, 1938
 65. Spranger, Eduard *"Kulturprobleme im gegenwärtigen Japan und Deutsch."* Nichidoku Bunka Kyokai/Kokusai bunka Shinkokai, Tokyo, 1938 [昭和12年10月9日開催のSpranger 博士最終講演の記録。]
 66. エドアルド・シュブランガー述／小塚新一朗譯 『現代日本及び獨逸に於ける文化問題』日獨文化協會／國際文化振興會、1938年。[昭和12年10月9日開催のSpranger 博士最終講演の記録の邦訳版。訳者の小塚新一朗は同博士の弟子であり、東京美術學校講師。]
 67. Leers, Dr. von *"Das moderne Japan und seine pol. Lebensfragen"* Vortrag von Professor Dr. v. Leers, Berlin, 1938
 68. *"Die Junge Mandschurei in Bildern"* 満洲帝國政府、1938年。
 69. Zahcer, Dr. H. *"Die Tokugawa-Zeit und ihr Einfluss auf Wesen und Nationalgeist der Japaner"* Deutsche Gesellschaft, Tokyo, 1938
 70. Thomas Andrew Frank *"Sino – Japanese Conflict: what history says"* ゴシ出版社、1939年。[発行者: 辻子卯三郎]
 71. The Foreign Affairs Association of Japan *"The Japan Year Book 1938/39"* The Kenkyusha Press, 1939 [日本外事協会『英文日本年鑑』]
 72. Asahi, Isoshi *"The Economic Strength of Japan"* The Hokuseido Press, Tokyo, 1939 [邦題併記: 『皇國の實力』(朝日 五十四: 大戦開始時の駐米領事)]
 73. 高島誠一 *"National Income of Japan 1930 – 39"* The Japan Economic Federation, Tokyo, 1939 [East Asia Economic Intelligence Series (日本經濟聯盟) 著作兼発行者: 高島誠一]
 74. *"An Outline of the Manchoukuo Empire"* Printed and Published by the Manchuria

- daily news, Dairen, 1939 【Edited by the bureau of information, Manchoukuo state council, Hsinking.】
75. Staatliche Mussen zu Berlin “Ausstellung Altjapanischer Kunst” Verlag für Kunstwissenschaft Berlin, 1939 【柏林日本古美術展覧会記念図録・上下巻】
 76. Nippon Yusen Kaisha “Glimpses of the East – International Exposition of Japan: March-August Tokyo-Yokohama” N.Y.K. LINE, 1939 【日本郵船】
 77. Meissner, Kurt “Der Shintoismus als Quelle des Japanischen Volkscharakters und Nationalgeistes” Deutsche Gesellschaft, Tokyo, 1939
 78. Japanisches Kriegsministerium “Pflege des Soldatengeistes in der Kaiserlich Japanischen Wehrmacht” Deutsche Gesellschaft, Tokyo, 1939
 79. “Japans Surveys – The European War” The Tokyo Press Club, 1940 【日本記者クラブ】
 80. “Sata Aihiko Sensei: Eine Gabe der Schüler zum 70. Geburtstag” Osaka, 1940 【佐多愛彦伝記】
 81. 高梨光司『佐多愛彦先生傳』佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会、1940年。【非売品】
 82. 『佐多愛彦先生論文集』佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会、1940年。【佐多愛彦先生古稀寿祝賀記念事業会 編】
 83. Classen, Wilhelm “Japan im Sommer 1940” 出版社不明、1940年。【表紙上部中央に党鷲章】
 84. East Asia Economic Intelligence Series “The Shipping Industry of Japan” 1940
 85. East Asia Economic Intelligence Series “The Capital Market of Japan” 1940
 86. Suyeki, Tokunosuke “Contemporary Japan: a review of far eastern affairs” Foreign Affairs Association of Japan, Tokyo, 1940 【月刊誌。1940年6月号。】
 87. Blunck, Hans-Friedrich 譯者・長澤淑子／Ottokar Döhler “Flucht bei Zeiten” 明輝社、1941年。【1942年5月20日付で、中表紙に手書きの長文メッセージ有。エミールに贈呈されたこと以外は判読不能。長澤淑子？と著者の生写真が中表紙に挟んである。Erwin Zahnによる序文有。】
 88. Suyeki, Tokunosuke “Contemporary Japan: a review of far eastern affairs” Foreign Affairs Association of Japan, Tokyo, 1941 【月刊誌。1941年5月号。】
 89. Lüth, Paul “Frühling Schwerter Frauen - Umdichtungen japanischer Lyrik” Paul Neff Verlag, Berlin, 1942
 90. Oeser, Hans Ludwig “Japan Tradition und Gegenwart – Erzählungen und Gedichte” Verlag Deutsche Volksbücher GmbH, Stuttgart, 1942 【1942年1月22日付による、大島浩駐独大使の序文あり】
 91. Tjadens, Herbert “Japanische Legende” Wolfgang Krüger Verlag, Berlin, 1943
 92. Fürholzer, Edmund “Freundesland im Osten: ein NIPPONbuch in Bildern” Wilhelm Limpert Verlag, Berlin, 1943
 93. Seckel, Dietrich “Grundzüge der buddhistischen Malerei” Tokyo, Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens / Leipzig, Kommissionsverlag von Otto Harrassowitz, 1945
 94. Grew, J.C. “Zehn Jahre in Japan” Franz Mittelbach Verlag, Stuttgart, 1947
 95. Mecking, Ludwig “Die Vergrößerung im räumlich-zeitlichen Bilde Japans” vom Vorstand des Geographischen Instituts der Universität Göttingen, 1948 【28 – 36 頁部分のみ。In: Göttinger Geographisches Festkolloquium aus Anlaß des 80. Geburtstages von Wilhelm Meinardus. - Göttingen : Geograph. Inst. der Univ., 1948, S. 28-36】
 96. Vogt, Karl “Schnurrige Geschichten in Japan” 出版社不明 1948
 97. Vogt, Karl “Schnurrige Begebenheiten komische Käuze und Originale unter

- Deutschen in Japan in den ersten Jahrzehnten dieses Jahrhunderts nebst einigen andern Erzählungen*" Ninomiya, Japan, 1948
98. Piekaar, Dr. A.J. "*Atjeh – en de oorlog met Japan*" N.V. Uitgeverij w. van Hoeve, 's Gravenhage Bandung, 1949
 99. Hausmann, Manfred "*japanische Gedichte*" S. Fischer Verlag, 1951
 100. Mecking, Ludwig "*Japan- meerbestimmtes Land*" Franckh'sche Verlagshandlung, W. Keller & Co., Stuttgart, 1951
 101. Stahmer, H.G. "*Japans Niederlage – Asiens Sieg*" Deutscher Heimat-Verlag, Bielefeld, 1952
 102. Benl, Oser "*Seami Mtokiyo und der Geist des No-Schauspiels*" Verlag der Akademie der Wissenschaften und der Literatur in Mainz in Kommission bei Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1952 【1953年3月13日、ハンブルグにおいて著者からエミールへ贈呈された。『世阿弥元清と能の精神』ハンブルク大学 Oser Benl 教授によるセミナー (Ein Leben V : 223)】
 103. Wenck, Dr. Günter "*Über die geistige Nachkriegsentwicklung in Japan*" Universität Hamburg, 1953 【Oser Benl の助手 (Ein Leben V : 223)】
 104. Sophia University "*Monumenta Nipponica*" Sophia University Press, Tokyo, 1953 【邦題併記：『日本文化誌叢』。Oser Benl による "*Naturalism in Japanese Literature*" が掲載されており、1953年8月24日付で Benl からエミールに贈呈された。】
 105. Kerst, Dr. Georg "*Die Anfänge der Erschließung Japans*" Übersee Verlag, Hamburg, 1953
 106. "*Hokusai – Handzeichnungen und Aquarelle*" Museum für Kunst und Gewerbe Hamburg, 1955 【1955年5月6日～6月12日開催の葛飾北斎展カタログ】
 107. Praetorius, Emil "*Japanische Farbenholzschnitte*" Insel Verlag, Wiesbaden, 1955
 108. Lewin, Bruno "*Futabatei Shimei in seinen Beziehungen zur russischen Literatur*" Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens e.V., Hamburg, 1955 【ロシア文学と二葉亭四迷の関係】
 109. Debon, Günter "*Japanische Gedichte der neueren Zeit*" R. Piper & Co Verlag, München, 1956
 110. Meissner/Refardt "*Die Deutschen in Yokohama/Kobe*" Kommissionsverlag Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1956
 111. Lesser, Rose "*Die Eigenart der japanischen Alpen*" Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Hamburg, 1957
 112. Kawabata, Yasunari "*Schneeland*" Carl Hanser Verlag, München, 1957 【川端 康成『雪国』独訳版。1958年1月16日付の手書きメッセージ有（贈り主は判読不能）。エミール 80 歳の誕生祝いに贈られた。】
 113. Togo, Shigenori "*Japan im zweiten Weltkrieg*" Athenäum-Verlag, Bonn, 1958 【東郷 茂徳『時代の一面 対戦外交の手記』の独訳版】
 114. Kawabata, Yasunari / Translated by Edward G. Seidensticker "*Thousand Cranes*" Random House, 1959 【川端 康成『千羽鶴』英訳版。1968年（これには11月とは書かれていない）付で、Mineko Uenaka の直筆メッセージおよび署名入り。】
 115. Shigemitsu, Mamoru "*Die Schicksalsjahre Japans*" Alfred Metzner Verlag, Frankfurt am Main, 1959 【重光 葵『日本運命の年』独訳版。】
 116. Armbruster, Gisela "*Das Shigisan Engi Emaki*" Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens e. V., 1959 【信貴山縁起絵巻】
 117. Preetorius, Emil "*Zehntausendfaches Glück : Farbige Bildergrüsse aus Japan*. 16

- Surimono aus d. Sammlung Emil Preetorius*" R. Piper & Co Verlag, München, 1959
118. "Japan: Zum Staatsbesuch des Ministerpräsidenten Nobuske Kishi in der Bundesrepublik Deutschland" Japanische Botschaft, Bonn, 1959 【日本大使館／岸信介】
 119. Gutenberg, h. c. Erich "Über japanische Unternehmungen" Betriebswirtschaftlicher Verlag Dr. Th. Gabler, Wiesbaden, 1960
 120. Raspail, Jean "Miyamoto und die ehrenwerten Fremden" Engelhorn Verlag, Stuttgart, 1960 【文学作品】
 121. Meissner, Kurt "Fünfundsiebzigjährige Geschichte der evangelischen Kirchengemeinde deutscher Sprache Tokyo-Yokohama" 出版社不明 1960 【福音派教会】
 122. Brasch, Heinz "Ukiyo-e und Holzschnitte Japans" Deutsch-Japanische Gesellschaft Nordwestdeutschland e. V., Kiel, 1961 【邦題併記：『浮世絵と木版画』】
 123. "100 Jahre Japan – Deutschland" Japanisch-Deutsche Gesellschaft E. V., Tokyo, 1961
 124. 衣奈多喜男『日独修好百年記念ドイツ展』朝日新聞社、1961年。【写真と解説】
 125. "Nippon" Japanisch-Deutsche Gesellschaft E. V., Tokyo, 1961 【1861年における日本・プロイセン修好通商条約締結の100周年記念、及び日独協会創立50周年記念によるもの】
 126. Meissner, Kurt "Deutsche in Japan: 1639-1960" Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Tokyo, 1961
 127. Vogt, Karl "Aus der Lebenschronik eines Japandeutschen" Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Tokyo, 1962
 128. Meissner, Kurt "100 Jahre Deutsch-japanische Beziehungen" Ostasiatischen Verein Hamburg-Bremen, Hamburg, in Gemeinschaft mit dem Institut für Auslandsbeziehungen, Stuttgart, 1962
 129. "Besuch des Ministerpräsidenten von Japan in der Bundesrepublik Deutschland" Japanische Botschaft in Bundesrepublik Deutschland, 1962 【日本大使館】
 130. Nagai, Kafu "Geisha in Rivalry" Charles E. Tuttle Co. Tokyo, 1963 【永井 荷風『腕くらべ』の英訳版。1963年1月付けで、エミール85歳の誕生日祝に贈られたことがメモされている。贈り主は判読不能。】
 131. Brasch / Senzoku "Die kalligraphische Kunst Japans" Japanisch-Deutsche Gesellschaft E. V. Tokyo, 1963 【千足 高保（センゾク タカヤス、1910-1980）東京女子大学講師？】
 132. "Nippon" Japanisch-Deutsche Gesellschaft e. V., Tokyo, 1963 【日独協会】
 133. Senzoku, Takayasu "Kabuki – Das Theater des altjap. Bürgertums" Japanisch-Deutsche Gesellschaft E. V. Tokyo, 1964 【千足 高保】
 134. Honda, H.H. "Stray Leaves from the Manyoshu" The Hokuseido Press, Tokyo, 1967 【本多 平八郎『英訳 万葉二百集』1968年11月（於東京）付で、Mineko Uenakaの直筆メッセージおよび署名入り。】
 135. Nakane, Kinsaku "Kyoto Gardens" Hoikusha Publishing Co., Ltd. 1968 【中根 金作『京都の名庭百選』（1965）英訳版、第四版】
 136. Deutsche Bank "Japan" Johannes Weisbecker, Frankfurt(Main), 1971 【ドイツ銀行】
 137. "Paul Behnke" Deutsch-Japanische Gesellschaft, 出版年不明
 138. "The Japanese Population Problem and World Trade" Tokyo Association for Liberty of Trading, 出版年不明
 139. Amt für Berufserziehung und Betriebsführung "Japan im Deutschen

- Fernosthandel*” Der Deutsche Arbeitsfont, 出版年不明【表紙左上部分にハーケンクロイツ有。少なくとも1933-1945年の間。】
140. “*Bevölkerungsdichte Japans*” Deutsch-Japanisches wirtschaftsbüro, Hamburg, 出版年不明【141.142. と同じシリーズの2番。写真付解説。少なくとも戦後1960年前後】
141. Rebenitsch, G. “*Japan in der Liberalisierung*” Deutsch-Japanisches wirtschaftsbüro, Hamburg, 出版年不明【140.142. と同じシリーズの4番。写真付解説。少なくとも戦後1960年前後】
142. Fried, Ferd. “*Der wirtschaftliche Wiederaufstieg Japans*” Deutsch-Japanisches wirtschaftsbüro, Hamburg, 出版年不明【140.141. と同じシリーズの5番。写真付解説。少なくとも戦後1960年前後】

あとがき

拙稿は、ノイシュタット市公文書館司書の Hanemann さん、ルードヴィヒスハーフェン経済大学東アジアセンターの Rövekamp 教授、Koch 教授、図書館司書の Först さん等の大変熱心なご協力により完成した。また、偶然なる御縁で、私が居住するアパートの大家さんのお兄様ご夫妻が Forst 村で300年以上存続しているワイン醸造所の経営者であり、エミールが好んだ Forster Ungeheuer も生産していたというのは、運命を感じずにはいられない。懇切丁寧に説明してくれた Acham-Magin の女将さん（そして美味しい Ungeheuer！）、エミール兄弟の写真掲載を快諾してくださった親族の皆様など、多くの方々のお力添えを頂いた。

エミール遺品の日本美術品コレクションに関する考証は筆者の力が及ばず、実物に落款が確認できる3点を除き、制作者や時



(1926年、インドネシア西ジャワのチコボ村に、エミールと弟のテオドルによって建てられた、第一次大戦時に戦没したドイツ海軍の軍人を称えた石碑)

代を明らかにできていない。それが唯一の心残りとなった。願わくば、拙稿をご高覧され興味を持たれた方に、いずれそれらを明らかにしてもらいたい。

なお、これの初稿は2018年12月3日に脱稿した。投函した翌4日早朝、512番のバスに乗り、カール・ヘルフェリッヒ通りを経てノイシュタット中央駅に到着、歩いて病院へ向かい、次男が誕生した。エミールが眠る墓地は、出産した病院の真裏にあり、距離にして歩いて数分。かつて、ここでエミールの墓を探して歩いていた時、文献で見たのと同じ、1926年にエミールと弟のテオドルが蘭印に建てた石碑と瓜二つのものが視界に入ってきた。エミールのアジアに対する情熱を改めて感じたと共に、最後までエミールとディーナが傍で見守ってくれているかのような不思議な安心感があり、出産も無事に終えることができた。

6月末にはこのPfalzの地を離れることが決まっている。その前に、エミール・ヘルフェリッヒの墓前にて、原稿完成の報告をしたいと思う。



(ノイシュタット中央墓地にあるエミールとディーナの墓：筆者撮影)

2019年5月31日 堀 咲子

<ABSTRACT>

Emil Helfferich and Japan: His life and Japanese Collection

HORI Sakiko

The purpose of this thesis is to examine the relationship between Emil Helfferich (1878-1972) and Japan, focusing on Helfferich's work with Japanese at East Java, his experiences during his 1924 and 1940 visit to Japan. And also to introduce his private Japanese collection. Although Helfferich was not irrelevant to the National Socialists, the purpose of the proposed thesis is not to focus on any political views or theories, but examining various perspectives based on international Japanese studies.

Emil Helfferich was born fourth of seven children from a merchant family in Neustadt in the former Land Rheinland-Pfalz, Germany. His eldest brother was Karl Helfferich, Vice Chancellor of the German Reich in the World War I and financial expert during the Weimar Republic.

As a boy, Emil Helfferich dreamed of distant lands and a career in the navy of the newly risen German Empire. However, since the naval officer career remained closed because of a slight visual impairment, he chose another path in life as an overseas merchant to the delight of his father.

His autobiography *“Ein Leben”* describes Helfferich and how he came to the profession of being a merchant. His main interest was not business and revenue related but adventuring and exploring distant lands. Thus he became an overseas trader. He had met a number of Japanese traders and business individuals when he visited East Java.

His collaboration with Japanese merchants, expanded his field of activities to East Java and later to Central Java, bringing him into contact with Java sugar culture, but even more, opening up a new world for him, Japan

later.

He twice traveled to Japan, wrote about the journey and his impression of Japan in "*Ein Leben*".

In 1970, Helfferich moved back to his hometown of Neustadt an der Weinstrasse at the age of 92, handing over his collection and library catalogued under Emil Helfferich collection.

He died in 1972 at the age of 94 years. His noteworthy collection of East Asian Studies has been in the East Asian Institute of the University of Applied Sciences Ludwigshafen since 1997.

His Japanese collections consisting of arts and publications. There are dozens of Japanese Arts, such as Hasui Kawase (1883-1957), Gyokusei Tsukioka (1908-1994), a daughter of Kogyo Tsukioka, and Seiho Takeuchi (1864-1942), Satsuma ware, Kakejiku (Japanese hung scroll). And also there are around 140 collection of books related to Japan, mostly published in the pre-war period.

According to Japanese newspapers at that time, Emil Helfferich was only expressed on his political perspectives. However, it is clear that he was not only that categorized person, but he was, in short, a trader who has explored the world, and as an oriental art collector.